

蝶の博物詩

生態11

蝶と花5



キアゲハとタンポポ
(2006年6月1日 野尻)

photo by

Nishiyama

蝶の博物詩

生態11

蝶と花5

昨秋、石垣島で突如として蝶が大発生した。道端のセンダングサの白い花という花に蝶が群れ、土地の人は何十年に一度のことといい、蝶屋は“爆産”と呼んだ。スジグロカバマダラなどの駄蝶が主であったが、誰もが自然の回復力はすごいと感じたに違いない。

しかし12月になると異常な低温と長雨のため、森の中に姿を消した。寒さに強いリュウキュウアサギマダラなども、気温20℃以下になると飛ばなくなる。

樹液を吸いにくるタテハチョウ類や夜間に活動する蛾では嗅覚が頼りであるが、訪花する蝶ではまず視覚によって花を認識する。100 m以上離れた山を越えて、ハイビスカスの赤い花を目がけて一直線に急降下するツマベニチョウをみているとよくわかる。花の匂いよりはまず色であろう。

どの色を好むかは蝶の種類によってさまざまである。赤を好むツマベニチョウは黄色や白い観賞用の栽培種はあまり好まないようである。またモンシロチョウは赤い花には寄りつかない。紫色の花が好きで、次に黄、青の順である。このように蝶に色の好みがあることは色を識別する能力のあることを示唆している。

蝶をはじめ昆虫の複眼の解像力はヒトの眼に比べてはるかに悪い。その画素数は1万程度で、きわめて粗い像しかみえない。しかし動いているものを捉える能力、つまり時間的分解能は10倍も高く、たとえばハエには蛍光灯が点滅してみえる。したがって夢中で吸蜜している花の上の蝶を手でつまもうとすると、指の動きはスローモーションのように見え、悠々と逃げることのできるのだ。

蝶に花の色を覚える能力があり、同種の花から花へと移動するのは、蝶にとっては吸蜜によるエネルギーの補給であるが、花の立場からは花粉の正確な授受、ひいては種の保存、繁栄のためにまことにありがたい。春の草原で、黄色いタンポポの花を、次々と敏速に渡り飛ぶのはキアゲハである(図)。キアゲハによく似たナミアゲハやクロアゲハは赤い花が好きで、タンポポに寄りつかないのも面白い。

赤、黄色といっても、蝶は紫外線側を感じ、赤い色を感じないので、われわれがみている世界とは違う。蝶にだけみえる紫外線で花の写真を撮ると、オシベ、メシベのある中心部は花片の他の部位とは別の色がついている。これを蜜標という。蝶はこの紫外線吸収領域に誘引されて蜜源に達して蜜を吸い、受粉が成功する。

西山茂夫